

大学生の敬語使用意識における男女差と敬語教育

横倉 真弥

人は、他者と自己イメージを表現、交換しながらコミュニケーションを行う。一般的に「丁寧さ」を表示する「敬語」もその使用によって様々な「イメージ」を与えることができるが、話者はそれを用いることでどのような自己を表現しようとしているのか。また、そこには男女差はあるのだろうか。

上記の問題意識のもと、本発表では、(1)大学生を対象に行った敬語使用意識についてのアンケート調査(於：岐阜協立大学 2023年5月15日～22日実施)にみられる男女差と、(2)ポライトネスの観点からの敬語教育の課題の提示について報告する。

アンケート調査の本発表に関わる質問内容は、①敬語が上手に話せる社会人男性/女性にどのような印象を抱くか。②敬語が上手に話せない社会人男性/女性にどのような印象を抱くか。③敬語を使うことで相手にどのような自分だと思われたいか、についてそれぞれ該当するものを選択肢の中から3つ選ぶというものである。(回答の男女別統計をとってはいるが、対象とした学部学生の男女別構成の特徴上、全回答者300名のうち、男性265名、女性35名と性別に偏りがあることをお断りしておく。)

調査結果から以下の点を指摘できる。

(1)大学生が、敬語がきちんと使える社会人男性/女性に対して抱く印象は「丁寧である」「常識がある」「きちんとしている」が共通して上位にランクしている。そしてその逆の場合には、「常識がない」「失礼である」「きちんとしていない」が上位となり、敬語が上手に使える場合の印象とベクトルが逆になっている。また、敬語を使うことによって相手から見られたい自分については「常識がある」「丁寧である」「信頼できる」が上位3つとなった。

このことから、大学生にとって「敬語」は、「常識」「丁寧さ」「きちんとしている（信頼）」といったイメージを想起させるものであり、社会的成員になろうとする彼らにとって必須の要素であることを、意識的/無意識的にも理解していることがうかがえる。

（2）しかしながら同時に、本調査では男女間で微妙な差も確認された。「敬語」が上手に使えることの印象では、その使用者が女性であると「上品」という印象が加味される点である。敬語が上手に使える社会人女性に対する印象では、男子/女子を問わず「上品」が2番目に多く、しかも女子では69%が選択しているのである。そして女子学生のおよそ31%が、敬語を使うことによって自分は「上品」だと思われたいと回答している。このことから「敬語」の「上品」性は、相手に対しても、自己に対しても、女性と親和性が高いことが指摘できよう。

上記から、「常識がある」や「きちんとしている」「丁寧である」といった印象は男女ともに社会人として必要なイメージであると見られていることがうかがえるが、「上品」だけが「女性」という「社会的属性」と強く結びついており、女子の言語行動の規範になっていること、そして女子の方が男子よりもこの規範性を強く感じ、実行しようとしている点が指摘できよう。この点は、「礼儀正しさの規範からの逸脱への社会の許容度が、女性は男性よりもはるかに低い（宇佐美 2006：32）」という指摘との関連が考えられる。本調査結果では、敬語が上手に話せない社会人女性に対する印象として「下品」を選択した学生が男女合わせて80名おり、同じ条件の社会人男性に対する印象として「下品」を選んだ学生（41名）のおよそ2倍いることが、規範の逸脱に対する“社会的制裁”の偏りを示していると考えられる。

以上の敬語使用意識における大学生の男女に共通する面と相違する面を踏まえて、敬語教育を行う場合、課題となる点について以下に指摘しておく。

（1）敬語は上下関係やそれを「わきまえ」た言語表現の側面があり、「常識」が社会的規範や社会的制裁と結びついている点への「気づき」を促す必要がある。これは社会人として「常識」の重要性を強く感じている学生には重要なことである。特にジェンダーの観点からは、女性に求められる「上品」は女性自身がその規範性を感じている点、そして社会的規範から外れた

場合、社会的制裁は男性よりも女性の方が強く受けやすいことを意識している点などへの「気づき」があげられよう。(念のために「上品」あるいは「品位」それ自体は否定する必要はない。) 社会的規範や社会的制裁について上記例と同様のことは、「敬語」を超えて言語活動一般にもいえるのであり、その点への「気づき」の促しはジェンダーの観点にとっても、またお互いを認め合う多様性の観点からも重要であろう。「気づき」の促しは、ある「考え」への誘導を意図しないし、「気づき」によって「考え」が変化しない場合もある。しかしながら、「気づき」によって、反射的な社会的制裁をいったん踏みとどまらせるという効果くらいはあるかもしれない。SNS やコンプライアンスの重みが増す近年においては、その一瞬の有無が自己や他者にとって重大な結果を左右するものになることを意識する必要があるだろう。

(2) 同時に「敬語」は、上下関係や「わきまえ」を超えた「他者」への配慮を示す言語表現であり、この点でポライトネスという広い観点から敬語を位置づけなおす教育が必要であると思われる。「他者の人格」への侵害・威嚇を回避する、あるいは軽減することが社会的成員として必要であり、「他者」との適切な距離を保ちながら関係性を築いていく言語システムの一環としての敬語教育の可能性を求めることは重要であると考えられる。

【引用文献】

宇佐美まゆみ (2006) 「ジェンダーとポライトネス—女性は男性よりポライトなのか?—」
日本語ジェンダー学会編『日本語とジェンダー』, 21-37.

(よこくら まなみ・岐阜協立大学准教授)